

係助

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の帝の

格助 係助 四段・体 サ変・用 過去「けり」終

格助

御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」

格助

格助 格助 完了「たり」用 格助

四段・命 下二・未

と書きたりけり。帝、篁に、「読め。」と仰せ

格助 存続「たり」用

格助

格助 係助 四段・用 補四段・用 意思「む」終

尊敬「うる」用 過去「けり」已 四段・用 補四段・用 意思「む」終  
られたりければ、「読みは読み候ひなむ。」  
完了「たり」用 格助 四段・用 係助 格助 強意「ぬ」未

されど、恐れにて候へば、え申し候はじ。」

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

と奏しければ、「ただ申せ。」とたびたび

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

仰せられければ、「さがなくてよからむ」と

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

申し候ふぞ。されば、君を呪ひ参らせ

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

候ふなり。」と申しければ、「これは、おのれ

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

放ちては、誰か書かむ。」と仰せられければ、

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

「さればこそ、申し候はじとは申し

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

候ひつれ。」と申すに、帝、「さて、何も、書き

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

存続「たり」終 係助 強意「つ」未 係助 格助 下二・未 尊敬「うる」用  
たらむものは、読みてむや。」と仰せられ

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

ければ、「何にても読み候ひなむ。」と申し

格助

格助

格助 係助 四段・用 補四段・未

格助

ければ、片仮名の「ね」文字を十二書かせ給ひて、

格助

格助

格助 係助 四段・命 下二・未 尊敬「うる」用 格助

格助

「読め。」と仰せられければ、

格助

格助

格助 係助 四段・命 下二・未 尊敬「うる」用 格助

格助

「ねこの子のねこのこねこ、しこの子のしこのこ。」

格助

格助

格助 係助 四段・命 下二・未 尊敬「うる」用 格助

格助

と読みたりければ、帝ほほ笑ませ給ひて、

格助

格助

格助 係助 四段・命 下二・未 尊敬「うる」用 格助

格助

事なくてやみにけり。

格助

格助

格助 係助 四段・命 下二・未 尊敬「うる」用 格助

格助

今となつては昔のことだが、小野篁という人がいらつしやつた。嵯峨天皇の

みよ 御代に、内裏(宮中)に(誰かが)札を立てたのだが、(そこには)「無悪善」

と書いていた。帝は、篁に、「読め。」とおつしやつたので、「読むことは読みましょう。」

しかし、恐れ多いことごとございますので、申し上げることはできません。」

と申し上げた(奏上した)ところ、「とにかく申せ。」と何度も

おつしやつたので、『さがなくてよからむ』(嵯峨天皇がいなくて)世が(良くなるだろう)「と

申し上げてございます。ですから、君(帝)を呪い申し上げているのです。」

と申し上げたところ、「これは、(読むことが出来る)おまえを除いては誰が書くというのだろうか。(おまえ以外には書くはずがない。)」とおつしやつたので、「ですから、申し上げませんと申したのでございます。」

と申し上げると、帝が、「それでは、何でも書いているようなものは、読むのだろうか(読めるのか。)とおつしやつたので、「何でもきつと読みましょう。」「と申し上げたところ、(帝が)片仮名の「子」の文字を十二個お書きなさつて、「読め。」「とおつしやつたので、

「猫の子の子猫、獅子の子の子獅子。」と読んだところ、帝は微笑みなさつて、おとがめなく終わったのだつた。